

子どもと表現

—和太鼓を使った指導における配慮—

Child and Representation

—Consideration of Instruction on the Use of the Japanese *Wadaiko* Drum—

(2019年3月29日受理)

土師 範子 中 典子
Noriko Haji Noriko Naka

Key words : 子ども, 表現, 指導, 和太鼓

要 旨

本研究では、一人の和太鼓指導者による「指導上の配慮」についてインタビューを行い、今後の音楽表現の指導における和太鼓の可能性を探ることである。

2019(平成31)年1月に、子どもや大人に対して和太鼓の指導を行っている一人の指導者(指導歴16年、女性)に対してインタビューを行った。インタビューでは「どういったことを意識して和太鼓指導を行っているか」ということについて自由に語ってもらうことをお願いした。インタビューの内容をKJ法(川喜田 1970)をもとにして分類整理を行った。

インタビュー内容を検討した結果、53の〈データラベル〉を導き出すことができた。それにもとづいて第1段階のグループ編成を行うと〈47「桴」と「雑誌3冊を重ねたものをガムテープでしっかり止めたもの」で練習することを推奨している〉を除く52〈データラベル〉で10の[グループ]を導き出すことができた。それらにもとづいて第2段階のグループ編成を行うと2つのグループ、【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】と【家庭での和太鼓の練習方法への提案】にまとめることができた。

1. 目 的

文部科学省(2018:8)の小学校学習指導要領(平成29年告示)解説「音楽編」では「④『我が国や郷土の音楽』に関する学習の充実」が求められている。小学校3年生以上になると、鑑賞学習の中で「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを捉えやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、色々な種類の曲(文部科学省 2018:84, 113)」をとりあげることになっている。指導計画の作成には、「音楽科で取り扱う教材は、我が国の伝統や文化、自然や四季の美しさや、夢や希望をもって生きることの大切さなどを含んでおり、道徳的心情の育成に資するものであること(文部科学省 2018:

123)」が必要となっている。小学校においては、和楽器に親しむ機会が3年生以上となっている。しかし、音楽は、母親の胎内にいるときから聞いているものであり、それぞれの発達の中で様々な楽器に慣れ親しむことが必要である。楽器を用いることで、子どもの興味・関心が引き出され、自分で何かをしようとする意欲をもたらすことになる。このように考えると、和楽器を小学校3年生から触れるのではなく、乳幼児期から親しむ必要があるといえる。

幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定子ども園教育保育要領の5領域の中に「表現」がある。内容としては、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ということである。表現の中には、

絵・言葉などの表現，運動などの身体的表現や歌・楽器などの音楽的表現がある。和太鼓についてみていくと，それは音楽表現的要素があるとともに身体表現的要素を兼ね備えているといえる。和太鼓に着目して，子どもの表現発達について検討していく必要がある。

和太鼓は日本に昔から存在する楽器であり，神具や術具・神楽や歌舞伎の音楽の一部として用いられてきた。和太鼓のみが音楽的に用いられ，舞台芸術として確立された歴史は浅い。西洋の楽器や，日本の他の伝統楽器と比較しても，先行研究が少なく，保育・教育分野での研究は，今後，特に研究を深めていく必要のある分野である。

和太鼓は，旋律がなく，桴で打てば誰でも音が出せるので，保育・教育現場で取り組みやすい楽器である。しかし，有効な導入や指導法についての先行研究が少ない。これまで，筆者は，保育園で和太鼓に取り組んでいる保育者から「全く和太鼓の指導を受けたことがなく，方法も解らないが子どもに教えている」という話を聞くことがあった。また，小学校教諭から「音楽で取り入れたいがどういったリズムを打ったら良いのか，どう教えたら良いか解らない」という話もあった。このことから，和太鼓の指導法についての研究は保育・教育現場から求められているといえる。

そこで，本研究では，一人の和太鼓指導者による「指導上の配慮」についてインタビューを行い，今後の音楽表現の指導における和太鼓の可能性を探ることとする。

2. 方 法

2019(平成31)年1月に，子どもや大人に対して和太鼓の指導を行っている一人の指導者(指導歴16年，女性)に対してインタビューを行った。インタビューでは「どういったことを意識して和太鼓指導を行っているか」ということについて自由に語ってもらうことをお願いした。

インタビューの内容を，KJ法(川喜田 1970)をもとにして分類整理を行った。KJ法を用いる理由は，和太鼓の指導に関して自由に考えていることの回答を得たからである。

※倫理的配慮

インタビュー協力者に，研究の趣旨を説明し，合意が得られたのちにインタビューを開始した。また，原稿が完成した段階で，協力者に一読賜り，原稿の公表の了解を得た。

3. 結果と考察

(1) 基本情報

指導者が和太鼓を始めたきっかけは，保育園の年長の時に和太鼓に取り組む時間があつたこと，地元のグループの演奏を聞く機会があつたことからである。それにより，和太鼓に対して興味関心をもつようになった。また，小学校低学年の時に演奏を聞いた際に心臓の内側から殴られているような感じがしたと記憶している，と語った。

(2) 分類整理の結果

インタビュー内容を検討した結果，53の〈データラベル〉を導き出すことができた。それにもとづいて第1段階のグループ編成を行うと〈47「桴」と「雑誌3冊を重ねたものをガムテープでしっかり止めたもの」で練習することを推奨している〉を除く52〈データラベル〉で10の[グループ]を導き出すことができた。それらにもとづいて第2段階のグループ編成を行うと2つのグループ，(表1)【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】と(表2)【家庭での和太鼓の練習方法への提案】にまとめることができた。

(表1) 【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】

[第1段階グループ]	〈データラベル〉
[1 和太鼓は魅力的]	〈1 お箸でテーブルをたたいて練習し始める〉
	〈2 鉛筆で机をたたいて練習し始める〉
	〈3 授業中も和太鼓の練習をしている〉
	〈4 動きがあり声が大きく出せる〉
	〈5 普段の生活で大きい声は出せないが練習では思い切り声を出すことができる〉
	〈6 幼児や小学校低学年、大人は声をしっかり出すことでき発散できる〉
	〈7 大きい音が出ているが心地よくなり、練習についてきている弟妹が毎回寝ている〉
	〈8 和太鼓の音は一説には胎内で聞いている音と同じ気持ちいい効果がある〉
	〈9 体育的要素と音楽的要素を兼ね備えている〉
[2 和太鼓で得られる感覚]	〈10 響く感覚がある〉
	〈11 振動を感じとる〉
	〈12 筋肉に響いてくる〉
	〈13 集中できる〉
[3 和太鼓を打つこととは]	〈14 全身運動になる〉
	〈15 リズム表現と身体表現ができる〉
[4 和太鼓指導の特性]	〈16 和太鼓指導は口頭説明のみでは理解が難しい〉
	〈17 口頭説明のみでは和太鼓を打つことが難しい〉
	〈18 ピアノや歌の場合は楽譜を見たり、耳で聞いたりして練習できるが、和太鼓の場合は手順が関わる〉
	〈19 音だけ聞いても手順はわからない〉
	〈20 家での練習方法として動画が多用されている〉
[5 指導の工夫]	〈21 言葉でしっかりとやりとりしてから打ってみようとしている〉
	〈22 和太鼓を打っている指導者の動画を見せる〉
	〈23 言葉で意図を伝え、同時にリズム譜を書く〉
	〈24 鏡で自身の姿を見て練習するように働きかける〉
	〈25 スマートフォンやビデオカメラで指導者の動きを保護者にとってもらう〉
	〈26 Youtube にあげて特定の人のみ見られるように公開している〉
	〈27 打ちながらジャンプをするなどの動きをつける〉
	〈28 理解度を表情にあらわしてくれるので表情をよく見る〉
	〈29 簡単すぎても難しすぎても面白くないので狭間を考えながらその場でリズムを伝える〉
	〈30 “挑戦してみようか”と伝える〉
	〈31 イメージができるようにテーマを伝える〉
	〈32 家で練習してもらうために動画を作成する〉
	〈33 動画を何回も見るように伝える〉
	〈34 指導者が本気で打つと子どもの本気で打つ〉
	〈35 思春期の男子には男性指導者が声をかける〉
[6 理解度の把握]	〈36 言葉で返してもらい、言葉で言うことができる〉
	〈37 にこにこしている場合はリズムを楽しんでいる〉
	〈38 口が開いて目が定まらなと打てていない場合が多い〉
[7 工夫の成果]	〈39 家庭で動画を見て練習するようになる〉
	〈40 リズム譜や言葉を書くことで理解できるようになる〉
[8 課題]	〈41 小学校高学年の男子は大きい声を出すことが恥ずかしい〉
	〈42 小学校高学年の男子の中には辞めるという子どももある〉

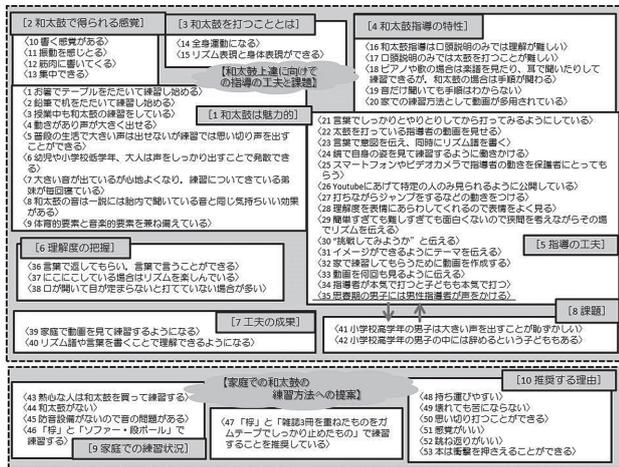
(表2) 【家庭での和太鼓の練習方法への提案】

[第1段階グループ]	<データラベル>
[9 家庭での練習状況]	<43 熱心な人は和太鼓を買って練習する>
	<44 和太鼓がない>
	<45 防音設備がないので音の問題がある>
	<46 桴とソファー・段ボールで練習する>
	<47 「桴」と「雑誌3冊を重ねたものをガムテープでしっかり止めたもの」で練習することを推奨している>
[10 推奨する理由]	<48 持ち運びやすい>
	<49 壊れても苦にならない>
	<50 思い切り打つことができる>
	<51 感覚がいい>
	<52 跳ね返りがいい>
	<53 本は衝撃を押しさえることができる>

(2) 図解化と文章化

1) 図解化

(表1) 【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】と(表2) 【家庭での和太鼓の練習方法への提案】を図解化すると(図1)のようになった。



(図1) 家庭での和太鼓の練習方法への提案

2) 文章化

① 【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】について

(図1)にもとづいて、【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】を文章化すると次のようになった。

子どもたちは、和太鼓の打ち方を学ぶと、〈1 お箸でテーブルをたたいて練習し始める〉、〈2 鉛筆で机をたたいて練習し始める〉ことを始め、〈3 授業中も和太鼓の練習をしている〉ことがある。これは、和太鼓が、〈4

動きがあり声が大きく出せる〉、また、〈5 普段の生活で大きい声は出せないが練習では思い切り声を出すことができる〉からである。〈6 幼児や小学校低学年、大人は声をしっかり出すことで発散できる〉し、また、〈7 大きい音が出ているが心地よくなり、練習についてきている弟妹が毎回寝ている〉こともある。〈8 和太鼓の音は一説には胎内で聞いている音と同じ気持ちいい効果がある〉といわれている。〈9 体育的要素と音楽的要素を兼ね備えている〉ので、子どもたちにとって [1 和太鼓は魅力的] である。

[2 和太鼓で得られる感覚] を考えてみると、〈10 響く感覚がある〉、〈11 振動を感じとる〉ことができる。〈12 筋肉に響いてくる〉、〈13 集中できる〉ということがある。[3 和太鼓を打つこととは]、それは、子どもたちにとって 〈14 全身運動になる〉とともに、〈15 リズム表現と身体表現ができる〉。

しかし、〈16 和太鼓指導は口頭説明のみでは理解が難しい〉、〈17 口頭説明のみでは和太鼓を打つことが難しい〉、〈18 ピアノや歌の場合は楽譜を見たり、耳で聞いたりして練習できるが、和太鼓の場合は手順が関わるといえる〉、〈19 音だけ聞いても手順はわからない〉という [4 和太鼓指導の特性] がある。よって、〈20 家での練習方法として動画が多用されている〉といえる。

そのために、指導者は、〈21 言葉でしっかりとやりとりしてから打ってみるようになっている〉、〈22 和太鼓を打っている指導者の動画を見せる〉、〈23 言葉で意図を伝え、同時にリズム譜を書く〉、〈24 鏡で自身の姿を見

て練習するように働きかける)、〈25 スマートフォンやビデオカメラで指導者の動きを保護者にとってもらう〉、〈26 Youtubeにあげて特定の人のみ見られるように公開している〉というような視覚的な視点を重視した [5 指導の工夫] をしている。また、〈27 打ちながらジャンプをするなどの動きをつける〉、〈28 理解度を表情にあらわしてくれるので表情をよく見る〉、ようにしている。〈29 簡単すぎても難しすぎても面白くないので狭間を考えながらその場でリズムを伝える〉とともに 〈30 “挑戦してみようか” と伝える〉ようにしている。〈31 イメージができるようにテーマを伝える〉、〈32 家で練習してもらうために動画を作成する〉、〈33 動画を何回も見るように伝える〉ことで家庭での練習を働きかけている。手本を見せるために 〈34 指導者が本気で打つと子どもも本気で打つ〉ので、常に集中して和太鼓を打つ姿を見せるようにしている。それと同時に 〈35 思春期の男子には男性指導者が声をかける〉ようする場合もある。

以上の様な [5 指導の工夫] をする中で、[6 理解度の把握] を心がけている。〈36 言葉で返してもらい、言葉で言えたらわかっている〉、〈37 にこにこしている場合はリズムを楽しんでいる〉、〈38 口が開いて目が定まらないと打てていないと把握する〉ことである。

このような、[5 指導の工夫] をする中で、子どもたちは、〈39 家庭で動画を見て練習するようになる〉とともに 〈40 リズム譜や言葉を書くことで理解できるようになる〉という、[7 工夫の成果] がみえてくる。

特に、〈35 思春期の男子には男性指導者が声をかける〉ようにしているが、〈41 小学校高学年の男子は大きい声を出すことが恥ずかしい〉、〈42 小学校高学年の男子の中には辞めるといふ子どももある〉という [8 課題] があるので、指導のあり方を検討していく必要がある。

②【家庭での和太鼓の練習方法への提案】について

(図1) にもとづいて、【家庭での和太鼓の練習方法への提案】を文章化すると次のようになった。

和太鼓は、日々の練習の積み重ねであるので、家庭で練習してもらう必要がある。現在指導している子どもたちの [9 家庭での練習状況] については、〈43 熱心な人は和太鼓を買って練習する〉が、多くの家庭では 〈44 和太鼓がない〉、〈45 防音設備がないので音の問題がある〉、〈46 「桴」と「ソファー・段ボール」で練習する〉

という状況である。

指導者としては、〈47 「桴」と「雑誌3冊を重ねたものをガムテープでしっかり止めたもの」で練習することを推奨している〉。そうすることを [10 推奨する理由] は、〈48 持ち運びやすい〉、〈49 壊れても苦にならない〉、〈50 思い切り打つことができる〉、〈51 感覚がいい〉、〈52 跳ね返りがいい〉、〈53 本は衝撃を押さえることができる〉からである。

4. 総合考察

本研究では、一人の和太鼓指導者による「指導上の配慮」についてインタビューを行い、今後の音楽表現の指導での和太鼓の可能性を探っていった。

2019(平成31)年1月に、子どもや大人に対して和太鼓の指導を行っている一人の指導者に対してインタビューを行い、53の〈データラベル〉を導き出すことができた。それにもとづいて第1段階のグループ編成を行うと 〈47 「桴」と「雑誌3冊を重ねたものをガムテープでしっかり止めたもの」で練習することを推奨している〉を除く 52 〈データラベル〉で10の [グループ] を導き出すことができた。それらにもとづいて第2段階のグループ編成を行うと2つのグループ、【和太鼓上達に向けての指導の工夫と課題】と【家庭での和太鼓の練習方法への提案】にまとめることができた。

このことから、和太鼓上達に向けての指導の工夫については、指導者の動きをよく見るように働きかけ、視覚的な視点を中心として子どもが学んで行くことに重点を置いていることがわかる。和太鼓は、リズム、打ち方などを考えながら演奏する音楽的表現と身体的表現をするための楽器であるといえる。よって、音の出し方・打ち方を、指導者の動作の見本で見なければ把握が難しい場合もある。和太鼓を使った指導を行うには、視覚的な配慮が特に必要であるといえる。

それと同時に、リズムを選定する、イメージできるようにテーマを伝えることは、子どものやる気を引き出すことになる。子どもに、視覚的な配慮、イメージできるように具体的に伝えることが必要であるといえる。このような指導をする中で、指導者は、子どもの表情をよく見て、和太鼓の打ち方を伝え、子どもが挑戦してみよう

と思えるように働きかけることになる。

指導者が、インタビューの中で、動画を自分で作成し、それを見るように伝えるという回答があったが、分類整理をした結果から、これが指導上、最も大事なことであるとする。指導者が本気で和太鼓を打つ姿を見せることは、子どもの本気を引き出し、学ぶきっかけになるといえる。

和太鼓の上達には、日々の練習が必要となってくるので、以上のような指導の工夫をして、家庭で和太鼓の練習をするように働きかけている。その工夫として、〈47 「桴」と「雑誌3冊を重ねたものをガムテープでしっかり止めたもの」で練習することを推奨している〉ことがある。分類整理の結果から、いかに、「いつでも、どこでも、練習したいと考えた時に練習できる場をつくることができるか」ということである。また、衝撃を押しさえるというのに雑誌が望ましいということもある。

指導上の課題としては、〈41 小学校高学年の男子は大きい声を出すことが恥ずかしい〉〈42 小学校高学年の男子の中には辞めるという子どももある〉ということである。〈35 思春期の男子には男性指導者が声をかける〉ようにしているが、それでもやめてしまうという状況については、何が子どもにとって和太鼓の演奏から遠ざけてしまうのかを具体的に把握していく必要があると考える。

今後の音楽表現の指導で和太鼓の可能性を考えるのであれば、子どもが指導者の動作をみることができるよう配慮、リズムの選定、イメージできるようなテーマを伝えていくことであるとする。

謝辞 本研究をするにあたり、インタビューに協力してくださった方に感謝の意を表す。

文 献

- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 音楽編』東洋館出版社
- 全国保育士会編(2017)『～平成29年3月31日告示～保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領』全国社会福祉協議会
- 川喜田二郎(1970)『続・発想法 KJ法の展開と応用』

中央公論新社